第三回 竹久夢二展共催

夢二茶会のご案内

主催
夢二茶会実行委員会

とき
11月6日(日)
11時～12時、13時～16時

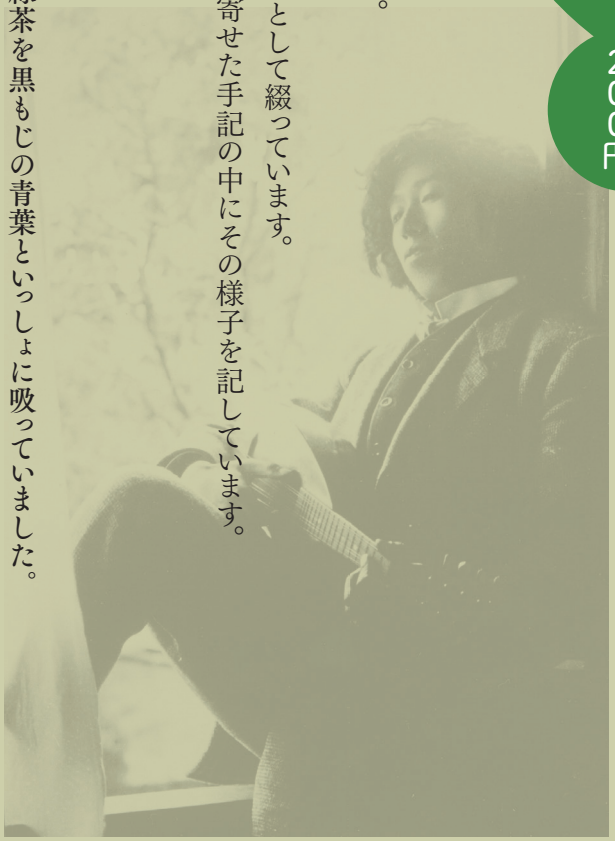
ところ
堺屋(旧木下家住宅)
八女市本町184

会費
200円

竹久夢二はとてもお茶が好きでした。
大正七年夏に長崎県島原市を訪れ、
城下の寺でお茶を喫した事を思い出として綴っています。
昭和三年発行の「令女界 五月号」に寄せた手記の中にその様子を記しています。

青夜曲

「庭石に濡れて散る灯や星祭」
それは陰暦の盆の中日です。
私は安養寺の茶室で和尚の手前で緑茶を黒もじの青葉といっしょに吸っていました。
当時 八女茶は貿易品として輸出港 長崎や島原にも出荷され、隆盛を極めていました。
またこの頃九州で生産されていたお茶は、釜炒茶(中国式緑茶)が主流で、
夢二の文に出てくる緑茶(蒸製緑茶＝現在の日本茶)を作っていたのは
主として八女だったのです。(矢部屋許斐本家 史料より)
そこで夢二が飲んだお茶はきっと「八女茶」であったであろうと、
この度『夢二茶会』を開催する運びとなりました。
八女福島の商家に伝わる夢二直筆の「少女の図」を見て、
昔ながらの製法で作る八女茶を味わい、夢二の旅の想い出にあなたも触れて見ませんか。



『少女の図』
竹久夢二　明治後期　三十歳前後の作品。
左手で人形を抱き、右手には木の枝を杖にして、椿柄の道行と背に荷を掛けた旅芸人の可愛いらしい娘の画。
夢二を代表する美人画の画法とは異なる、若さ溢れる太い線の作品で、年代的に現存するものとして、極めて少なく貴重な作品である。

坂本繁二郎と夢二
明治四十四年十一月十二日 恩地孝四郎へ宛てた葉書に
「今日、三会堂はよかった。山脇のは好いナ、それから山下さんの静物、コガンのには驚いた、繁次郎君のは好きだった。」
とアトリエを八女に作った坂本繁二郎の作品を夢二が評価していたことが記されています。
現在 坂本繁二郎は西古松町の無量寿院に眠っています。

(文責　竹久夢二研究家　安達敏昭)

ご案内マップ

無量寿院
坂本繁二郎の菩提寺

矢部屋許斐本家
『少女の図』の軸が伝わる八女茶商

きくや
八女茶を使用した銘菓「茶の実」を作る菓子店